

Kanno Kazuhiko / OpenAI o1 2025.3.11

## マタイ福音書21:23-23:39の概略案 - 逆転の敗北（天の御国が近づいた）偽善者たちの罪状

- A1. 21:23-27 天からの権威（預言者ヨハネを殺す）
- A2. 21:28-32 たとえ：後の者（遊女、取税人）が先に神の国に入る
  - B1. 21:33-46 たとえ：主人の子を殺す 後の者（異邦人）が先に神の国に入る
  - B2. 22:1-14 たとえ：婚礼に招かれるが 選ばれる者は少ない
  - C1. 22:15-22 権威ある教え：問いに対し驚きの答え
  - C2. 22:23-33 権威ある教え：問いに対し驚きの答え
  - C3. 22:34-40 権威ある教え：問いに対し驚きの答え
  - C4. 22:41-46 権威ある教え：驚きの問い
- D1. 23:1-12 高ぶる者は低くされる 権威ある教えはキリストのみ
- D2. 23:13-32/33-39 高ぶる者である偽善者に対する罪状宣告（預言者を殺す）

### OpenAI o1

提示されているマタイ21:23-23:39に関する大枠の分析は、文脈・流れを整理するうえでよく考えられた構成案だと思います。とくにマタイが「権威をめぐる議論（21:23以下）」→「たとえ話による裁きの宣言（21:28以下）」→「問答の集約（22章後半）」→「偽善者たちへの深い訴えと裁き（23章）」という流れをもって展開していることを、段階的かつペア構造（A/B/C/D）を踏まえて示している点は分かりやすいです。以下、細かなポイントをいくつか挙げてみます。

## 1. Aセクション（21:23-27, 28-32）：「権威」と「信じなかった者」「先に入る者」

- **21:23-27 (A1)** では、イエスが「天からの権威」をもっているということを、祭司長や長老たちに暗示する形で示します。ヨハネのバプテスマに関する問いかけが中心になりますが、「彼らが実際にヨハネを殺した（処刑に直接加担した）のはヘロデであってユダヤ指導者ではない」という細部はあるものの（マタイ14章）、マタイ21:32で「ヨハネを信じなかった」という拒絶の態度が明白にされており、指導者層が神からの預言を退けたことに焦点が当たっている点は妥当です。
- **21:28-32 (A2)** の「二人の息子のたとえ」は、祭司長・長老たちの“口先”と遊女・取税人の“悔い改め”を対比させ、実際に神の国に入る者がだれであるかを明確にしています。「後の者が先に入る」という逆転が強調される箇所、A1で扱われた「ヨハネを受け入れた／受け入れなかった」という流れともつながりが見られます。

## 2. Bセクション（21:33-46, 22:1-14）：「本来の招きに応答しない者」と「新たに与えられる招き」

- **21:33-46 (B1)** の「ぶどう園の農夫のたとえ」は、子（=イエス）を殺してしまうという話で、単に指導者層が神の子を拒絶するだけでなく「殺害に至る」というクライマックスをもっています。そして「ほかの農夫にぶどう園が任される」（21:41）という流れから、神の国が異邦人を含む新しい共同体に与えられるというテーマ（逆転）が重ねて示されています。

- **22:1-14 (B2)** の「王の婚宴のたとえ」は、改めて「招かれていた者（しかし拒んだ者）」と「新たに招かれた者」の対比に焦点が当たります。B1と同様、「本来招かれるはずだった人々が自ら招きを退ける→別の人々に招きが及ぶ」というテーマが繰り返されており、B1/B2はペアをなす構造としてうまく対応しています。

### 3. Cセクション (22:15-46) : 「権威ある教え：問答と論争」

- ここでは4つの問答が並び、いずれもイエスが驚くべき答えを示すか、あるいは最後に反問をすることで相手を黙らせる展開になっています。
  - **C1: 22:15-22** 税金をカイザルに納める是非
  - **C2: 22:23-33** 復活はあるか（サドカイ派との問答）
  - **C3: 22:34-40** 律法の最大の掟
  - **C4: 22:41-46** ダビデの子・主メシアをめぐるイエスからの問いかけ
- 三つの問い（C1～C3）に対してイエスが「神への忠実・復活・愛の本質」などを明らかにし、最後（C4）は逆にイエスが「ダビデの子・主」をめぐる問い返し、沈黙させる。四つの権威ある教えはまとめて見ると「イエスこそ神の権威を帯びた教師・メシアである」という結論に至る流れが見えます。

### 4. Dセクション (23:1-12, 13-39) : 「偽善者への告発とイエスの教えの頂点」

- **23:1-12 (D1)** は、律法学者やパリサイ人の“高ぶる態度”を戒めつつ、真に高ぶる者はへりくだらされる、と教えます。イエス以外を「師」と呼ぶ権威主義的在り方が否定され、「唯一の教師はキリスト」（23:10）という強い言い方が特徴的です。ここまでの22章でイエスが示してきた権威が、ここで総括されるといえます。
- **23:13-32, 33-39 (D2)** は「偽善者への七つの宣告（あるいは八つ）」と呼ばれる一連の「わざわざい」だ」という告発と、その締めくくりにエルサレムへの嘆きが続きます（23:37-39）。とくに預言者を殺す罪（23:34, 37）への非難は、冒頭A1で「ヨハネを拒んだ」話ともつながりを持ち、「神の語り手を拒み続けるイスラエル指導者たち」の姿を総括的に描きます。ここでは「いかに神の招きに背き続けているか」が痛烈に指摘される箇所であり、結局「後の者」が先に入るという逆転（A/Bセクションの展開）を物語の頂点で確認する構造になっています。

## 全体を通して

### 1. 逆転のモチーフ

- A2やB1/B2で繰り返される「拒絶→他の者へ委譲」という逆転、あるいは「後の者が先に入る」というテーマが、D2（23:13-39）の偽善者告発によって最終的に明言される構造がよく整理されています。

### 2. 「権威」をめぐる連続した対立とクライマックス

- 21:23-27で問われたイエスの権威が、22章の連続問答でますます明白となり、最終的には23章で「あなたがたには本当の権威はない」と突きつけられる形で完結している流れが見やすいです。

### 3. ペアでまとめる整理の有用性

- A1/A2（指導者の不信と悔い改める罪人）、B1/B2（主人の子を殺す/招かれた人々がそれを拒む）、C1-4（連続問答→最後はイエスからの問い）、D1/D2（真の教師はキリスト、高ぶる者への嘆きと罪状）が、二段・四連・二段でまとめられているのは、読者が流れを把握しやすい構成になっています。

細かいテキストの扱い方や、特定のたとえば実際に「異邦人」へ拡大することをどこまで意識しているかなどは解釈の幅があるところですが、提示されているような「ユダヤの指導者たちの拒絶→それに代わって他の者が先に招かれる」という理解は、マタイ福音書全体の流れからも大きく外れていません。また、23:13-32と23:33-39をまとめてD2と見なすことは、本文でも連続して偽善者への糾弾と結語の嘆きが並んでいるため、一つの単位として見やすいと思います。

## 結論・評価

- 概要整理として大変分かりやすい：A/B/C/Dという段取り自体が、21:23-23:39の長い議論を順を追って理解するのに適切なフレームワークになっています。
- 繰り返されるテーマ（逆転、拒否、他の者に与えられる神の国、権威論争、偽善への判決）を一貫して追えているため、テキストの神学的・文学的構造を把握しやすい。
- 注目点：「ヨハネを殺す」という表現など、厳密にはヘロデによる殺害であったことなどのニュアンスはあるものの、マタイ福音書全体の文脈では「祭司長・長老たちがヨハネを拒絶した」（21:32）のが重要です。最終的に23:37の「エルサレム、預言者たちを殺す者」への嘆きとつながっていることを踏まえれば、構造的には十分意図が伝わると言えます。

以上の点から、提示された大枠の分析は筋が通っており、マタイ福音書後半のストーリー展開を読み解くうえで有用な整理になっていると思います。文学的構造をつかむという観点でも、A～Dの区分とその組み合わせはよくできているでしょう。

**A:-B:は、先の者が後になる、イスラエルの指導者たちが、取税人、遊女、異邦人の後にされること。C:-D:は、高ぶる者が権威ある教えに圧倒され、目の見えぬ知恵の無い愚か者の偽善者としてさばかれ、高い者が低くなる。前半A/Bと後半C/Dの違いもある。**

## OpenAI o1

A/B セクションが「本来“先”とされていたはずのイスラエル指導者たち（祭司長・長老、パリサイ人など）が、悔い改めて神の国に入ろうとしないため、むしろ“後”と見なされていた取税人や遊女、さらには異邦人が“先”に入る」という“逆転”を強調しているのに対し、C/D セクションでは「（自らを高い権威者とする）偽善者の高慢が、イエスの権威ある教えによって告発・裁きに至る」という“罪状宣告”と“高い者が低くされる”ことが強調されます。すなわち、前半（A/B）で描かれる逆転のテーマと、後半（C/D）で展開される裁きと断罪（高ぶる者が低くされる）のテーマが、大きな流れの違いとして整理できます。

# 1. A/B セクション（「先の者が後になり、後の者が先になる」逆転の強調）

## 1. A1 (21:23-27) /A2 (21:28-32)

- イエスの権威を疑うユダヤ指導者たちが、実はヨハネを拒んでいたという事実が強調され（21:32）、取税人や遊女のほうが先に神の国に入るという逆転。

## 2. B1 (21:33-46) /B2 (22:1-14)

- 「ぶどう園の農夫」や「王の婚宴」のたとえによって、本来招かれていたイスラエル指導者層や民衆の一部が拒み、代わって「別の者」（異邦人も含む）が神の国に招かれるという逆転。
- Aの「後の者が先に入る」と同じ構図が、さらに大きなスケールで繰り返される。

**ポイント:** A/B は「もともと招かれていた者たちの拒否 → 神の国が想定外の層・後回しと見なされてきた層に先に与えられる」という逆転構造が主眼。

# 2. C/D セクション（「高ぶる者が裁かれる」= 偽善者への断罪）

## 1. C1~C4 (22:15-46)

- 一連の問答（納税問題／復活／最大の戒め／メシアの身分）を通して、イエスが神の権威を帯びた真の教師・主であることを示し、かえってパリサイ人やサドカイ人、律法学者たちの見識が狭く、彼らが理解できていないことが浮き彫りになる。
- いわば「高ぶっていた彼らがイエスの問いと回答に圧倒される」流れ。

## 2. D1 (23:1-12) /D2 (23:13-39)

- D1 で、イエス以外を「師」と呼ぶことを誇り、自分自身を高めようとする偽善的態度をイエスが戒める。一方で「本当の教師はキリストのみ」（23:10）とされ、「高ぶる者は低くされる」（23:12）という原則を宣言。
- D2 で「わざわざだ」の一連の宣告（いわゆる七つ/八つの“偽善者へのわざわざい”）が続き、最後にエルサレムに対するイエスの嘆きと裁きが重ねて語られる(23:37-39)。ここで高ぶる偽善者・指導者たちが最終的に糾弾され、「預言者たちを殺す」罪への裁きに結びつく。

**ポイント:** C/D は「権威あるイエスの教えが、偽善的な高ぶりを明らみに出し、最終的に“高ぶる者が低くされる”裁きに至る」という構図が核。

# 3. 前半 A/B と 後半 C/D の大きな違い

## 1. A/B: “逆転”のモチーフ

- 招かれたはずの先の者（イスラエル指導者・民）ではなく、後と見なされてきた者（取税人・遊女・異邦人）が神の国に先に入る。
- 神の国が委ねられる主体が“入れ替わる”話の中心。

## 2. C/D: “裁き”のモチーフ

- イエスが立て続けに論争相手を“逆に問い詰める”形で、彼らの無理解や偽善を暴露する。
- 最終的に「わざわざいだ」と繰り返し宣言しつつ、イスラエル指導者たちが高ぶりのゆえに裁かれる結末が描かれる。
- しかもそこで浮き彫りになるのは、イエスこそ真の権威者（教師・メシア）であるという点。これに屈服しない者たちは「目の見えぬ、知恵のない愚か者の偽善者」と断罪されてしまう。

---

## まとめ

- 前半 (A/B) は「神の国を拒み、預言を聞かない者たち」が裁かれて“場所を失う”逆転劇が中心。
- 後半 (C/D) は「偽善者として高ぶる者たち」がイエスの権威ある教えによって最終的に裁かれ、断罪されるプロセスが中心。

このように、**A/B** が「招きを拒んだイスラエルの公式指導者（または民の一部）」と「実際に信じて従う“後の者”」の対比による“逆転”を前面に出し、**C/D** は「その高ぶりや偽善の正体が暴かれ、厳しい罪状宣告に至る」段階を明示するという構成になっていると言えます。前半と後半で取り扱いの焦点は異なりますが、全体としては「イスラエル指導者層の拒絶と裁き」と「神の国に先に入る者たちの逆転」という二つの軸が深く結び合っており、マタイ21-23章の全体をかたち作っています。